

課題名：減災結（ゆい）プロジェクト—伝えよう減災，つなげよう未来へ—

連携機関：

東北大学広報課，東北大学総合学術博物館

東北大学災害科学国際研究所

宮城県教育委員会

仙台放送

### (1) 企画意図

大規模な災害はもはや防げない。その予知にも限界がある。東日本大震災から2年以上が経過し、多くの経験と教訓を得た。現在、問われているのは、全国での地域に根ざした「減災の啓発活動」である。東北大学は、災害科学国際研究所を中心に、災害科学の追究と共に東日本大震災を教訓に減災活動の推進（実践的防災学）を実施している。

南海トラフ大地震による人的・物的被害は計り知れない。震災を経験した被災地は、いま何を伝えていくべきなのか。これからの未来を担う子供たちに何を考えてもらい、生み出してもらうのか。産官学が融合することで新たな突破口を見出していく。工夫された教材を使った教育ソフトづくり、未来づくりにより「あすの被災地」の被害を最小限に食い止めるべく、継続的な「宮城からの発信」を目指す。

### (2) いままでの活動と企画内容

東北大学は、東日本大震災を受けて様々な減災活動をスタートさせた。なかでも災害科学国際研究所はその中心的な役割を担うべく、「減災」の意義を伝えていこうと減災風呂敷「結（ゆい）」の制作を行った。また、子供から大人まで減災を身近に認知いただくために、第2段として減災ポケット（ハンカチ）「結」の制作も行った。今後、ハンカチを携帯することで減災を常に意識し、加えて専門家による「出前授業」を受けることでその知識を生かした活動を企画する。

### (3) 活動の3つの柱

#### ① 教育プログラム・教材の開発

東日本大震災の経験や教訓を伝える減災ポケット教育プログラムを開発し、

そこでは、認知心理学や脳科学などの知見を活かした教材なども併せて開発・作成し、効率的な減災・防災教育の柱とする。

例えば、(ハンカチ)「結」については学校での配布を検討し、普段から携帯してもらっただけでなく、「結」をきっかけに家庭内での減災への意識を高める。

#### ② 伝え・つなげる場の提供 — 出前授業 (講演会)

減災を学ぶにあたっての基礎知識や被害想定、対応・対策を伝えることで児童・生徒の災害への自発的な取り組みを引き出す場を設ける。

#### ③ 東日本大震災の教材制作

東北大学アーカイブみちのく震録伝や仙台放送などが所有する資料映像に加えて、災害に関する資料・CGを併せ、理解しやすい視聴覚教材を作成する。

以上により、東北大学 (広報課・総合学術博物館や災害科学国際研究所) をはじめ、宮城県、国連防災世界会議の開催を 2 年後に控えた仙台市、そして民間企業各社が、産学連携のプロジェクトチームを結成し、「伝えよう減災つなげよう未来へ」のテーマを持つ減災プロジェクト結 (ゆい) 構想を具現化させていく。